

生存が脅かされているのは民の罪への神の審判であると、厳しく悔い改めを迫ると共に、神は来てあなたたちを救われる(35:4)とイザヤは最後まで民を励まし続けます。イザヤが初めて用いた言葉、「シオンの残りの者、エルサレムの残された者は、聖なる者と呼ばれる(4:3)」、「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み/その名をインマヌエルと呼ぶ。(7:14)」、「死を永遠に滅ぼしてくださる(25:8)」、「貴い隅の石(28:16)」、「そのとき、見えない人の目が開き/聞こえない人の耳が開く。(35:5)」は後世の人々の信仰に大きな影響を与えています。これらの言葉はイザヤが、詩人としての心の目でとらえた徴でしょう。ダビデ王を敬愛しているイザヤは歌をもって語り続けます。イザヤの詩は、構成に優れ、語彙、比喩の豊かさ、言葉のイメージの広がり、幅広い視野が感じられます。翻訳の労もあり、リズム感が感じられ、「聞け、耳を傾けよ」という彼自身の言葉に、納得せざるを得ません。イザヤの優しさと柔軟さが言葉に出ています。イザヤは徹底的に観察し、記録し、「頭から足の裏まで」という言葉のように、細部まで見落とすところがないのではないかと思います。



イザヤ G.A.Petrini

イザヤは滅亡した北イスラエルを見ます。この地で、彼らは苦しみ、飢えてさまよう。民は飢えて憤り、顔を天に向けて王と神を呪う。地を見渡せば、見よ、苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放。今、苦悩の中にある人々には逃れるすべがない。先に/ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが/後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた/異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。(8:21)イザヤは苦難と辱めを受けた地の民こそ、神の憐れみと栄光を受けると預言します。インマヌエル、平和の王として来られる方は弱い人のために正当な裁きを、この地の貧しい人を公平に弁護する。(11:4)と、アッシリアの圧迫の前で、イザヤはおののきながらも「神が我らと共におられるのだから」(8:10)との正義と平和が与えられるとの信仰を固く持ちます。

サルゴン2世に派遣された将軍がアシュドを襲い、占領した時のことです。それに先立って、主はアモツの子イザヤを通して、命じられた。「腰から粗布を取り去り、足から履物を脱いで歩け。」彼はそのとおりにして、裸、はだしで歩き回った。主は言われた。「わたしの僕イザヤが、エジプトとクシュに対するしるしと前兆として、裸、はだしで三年間歩き回ったように、アッシリアの王は、エジプトの捕虜とクシュの捕囚を引いて行く。」(20:2)イザヤの受けた屈辱的、絶望的姿が記されています。けれどもイザヤは「見よ、主は地を裸にして、荒廃させ……わずかなものだけが残された」(24:1)と、神の審判を自らの身に受け入れつつも、「神はひとりひとりを拾い集められる」(27:12)と希望を語っています。死ぬほどの屈辱であったでしょう。それゆえに「あなたの死者が命を得わたしのしかばねが立ち上がりますように」(26:19)と復活を求める祈りを捧げています。



イザヤ Caleb Stoltzfus

イザヤの預言通りにセンナケリブは、陣営が滅び、ラキシュから撤退し、帰国後、暗殺されたことと記され、この間の事情は列王記、歴代誌と並んで記されています。また、ヒゼキヤ王が死の病に罹り、イザヤは遺言するように勧めます。ヒゼキヤは泣き、神に訴えて、イザヤの助言によって、癒されます。イザヤ書にはヒゼキヤの回復後の感謝の祈りの言葉「主が近くにいてくだされば、人々は生き続けます。わたしの霊も絶えず生かしてください。わたしを健やかにし、わたしを生かしてください(38:16)」が記されています。けれども、病気が癒されると、見舞いを装って訪れたアッシリアの傀儡バビロン王の使者に、手の内をさらけ出してしまい、イザヤは「王宮にあるものがごとくバビロンに運び去られる日が来る」と預言します。アッシリアもやがて衰え、バビロンが覇権を持ち、脅かす存在になることをイザヤは知っていました。けれども、その後イザヤがどうなったのか、何も記されていません。